

第44回 出雲市同和教育講演会 「出会いと表現」

～人権教育はみんなが幸せになる勉強です～

第44回 出雲市同和教育講演会



8月21日(日)、出雲市民会館で徳島県同和地区青少年団体連絡協議会「止揚しやうの会」事務局の大湾昇さんをお迎えし、「出会いと表現」と題して、講演いただきました。大湾さんは人生を通した貴重な体験を、わかりやすく、エネルギーに話されました。

その講演内容の一部を抜粋して紹介します。

みちしるべ

第116号

人権・同和問題啓発広報
人権同和政策課
☎ 22-7506
同和教育・啓発推進会議

母との買い物 (14歳の頃)

14歳の頃、スーパーへ買い物に行くとき、母が車の中で決心したような顔つきになって、まっすぐ前を向いて声だけ僕に向けてこう言ってきました。「昇、お前、うちの家が同和地区って知ってた？」

「ああ、何となくだけど気付いとったよ」

「なら昇、お前うちの家が同和地区ってことについてどう思う？」

「母やん、僕は生まれてこのかた部落差別なんて見たことも聞いたこともない。もうないんよ。何も知らんもんに対して同和教育なんてしていくからこんな差別の仕方があるんだってわかって差別が残っていくんだろ。言わんかったらバレへんよ。僕は隠して生きるよ。」

母親は口を閉じ、車の中、買い物の最中、一切しゃべりませんでした。

彼女からの電話 (18歳の頃)

そして、4年が過ぎ、18歳になり、生まれて初めて彼女ができました。いつものように彼女から電話がかかってきました。「あつ、昇さん。あんな……」と言った後、急に泣き出しました。とりあえず、彼女が落ち着くのを待ち、その理由を聞きました。

すると、彼女が泣きながら「あんな、昇さんの家ってアレなんやろ。」って言いました。それを聞いた瞬間、僕はすぐ分かりました。大湾の家は同和

地区なんだろう。私たちふたりが交際していくうちに、もしかしたら両親、親戚から反対されるかもしれない。私、差別は怖い。よう立ち向かっていかんっていう意味を込めたアレっていう2文字であるということにすぐ理解できました。理解できると同時に、すごいショックを受けたんです。なぜならもうないと思っていた部落差別。それを生まれて初めて受けた相手が、大好きな彼女だったからです。

だけど、それ以上に疑問の感情がわきました。確かにうちの家は同和地区です。ただ、母に教えてもらった時にこう言いましたよね。「言わんかったらバレへんよ。」僕はこの生き方を貫き通していたんですよ。家族とも、先生ともまして学生レベルでなんて同和問題について話しません。にもかかわらず、一つ学年が下で、高校から初めて出会った、僕が住んでいる阿波市には住んでいない彼女がどこからともなく、大湾の家は被差別部落らしいという情報を仕入れて、不安になってアレっていう言葉を使って僕に差別を投げかけてきたんです。隠せないのかと思いました。

だけど、とりあえず、彼女の涙を止めてあげたいと思いましたので、彼女が勇気付く言葉を一生懸命考えました。「あんな、確かにうちの家はそうかもしれない。そやけどな、言わんかったらバレへんよ。」14歳の時に母親に言った言葉を今度は彼女に向けて言ったんです。その言葉を聞いて、今までやさしい口調でしか話しかけていなかった彼女が、初めて大声で僕に怒鳴りつけました。「ほんなんも隠せるわけないや

ろ！」言われて僕の頭の中は真っ白何も考えることができませんでした。しんどいなって思ってた僕がとった行動は、持っていた受話器を下しました。おやすみも何も言わんまま逃げました。その日を境に僕は変わっていききました。もつと逃げるようになったんです。僕の初めての恋愛経験は自然消滅しました。それから1年くらい女性恐怖症になりました。

「ただ、傷ついた僕を癒してくれたのは、やっぱりうちの家族だったんです。相変わらずうちの家族は明るかった。僕も将来、うちのようない家庭を築きたいって気持ちで自然と湧いてくるんです。そのためには、彼女をつくらなければいけない。結婚したいな。できたら子供にも恵まれたらいいなと思いました。」

――初めて自分の人生を振り返って（19歳の頃）――

そして、考えたんです。じゃあ、前の彼女と自然消滅したのは何か原因があるはずだ。自分の人生、一つずつ振り返って考えてみよう。自分の人生の振り返りを19歳になって生まれて初めて行ってみました。18歳の時に彼女ができたなあ。アレって言われたな。しんどかったなって思いました。14歳の時、母やんが立場を教えてくださいなと思つた時に、はっとしたんです。あつ、そうか僕は先程、皆さんに、生まれて初めて部落差別を受けた相手は18歳の時の彼女と言いましたけれど違ふとわかりました。「彼女じゃない。こいつだ。14歳の時の自分だ。」と思つたんです。この時母親に向けて言った「言わんかったら



バレへんよ」の言葉を考えました。それは隠すことで。何を隠すかといったら、自分の生まれ育った地域を隠すことです。それは自分自身が人様には言えない恥ずかしい場所と認識しているから隠すんです。じゃあ、その恥ずかしい場所に誰が住んでいるか。うちの家族が住んでいるんです。家族の一員は自分でしょ。「言わんかったらバレへんよ」という言葉を使って、回りに回って最終的に自分自身を差別していたことにやつと気づきました。差別者は彼女じゃない。自分だ。自分が自分のことを守らないで誰が守るんだ。自分のことを誰が好きになるんだと思いました。変わるの人は人じゃない。まず自分だ。自分を差別するのはやめようと思いました。そして、今までは寝たふりをする子だったのですが、起き上がります。一

つの目標を持つて立ち上がりました。それは、将来絶対に好きな子と結婚するという目標です。ぼくには大きい目標もありますよ。部落差別を中心とするあらゆる人権課題を解消した人権の守られた社会を築きたい。ですけど、この目標というのは僕ひとりの力で達成することはできません。もしかしたら、生きている間にできないかもわかりません。そんなわからない目標に向かえる程、僕は強くないんです。ですから、こうしようと思いました。できることからひとつずつ階段を上って行く。それをひとつずつ見つけていく。まず第一目にあるのは、好きな子と結婚する。これを達成できたら次のことにしたらいいわ。

それまでの僕は、例えば学生時代にイジメがあったとしても、今は違う。遊んでいただけ。ちよつとエスカレーターして度が過ぎただけ。僕の周りにイジメなんか無い。差別が起ころつても、臭い物には蓋をしろという、見て見ぬふりをする逃げるだけの人間でした。だけど、僕はこの目標を持った瞬間から自分の周りにはイジメがあり、差別があるのだということを認める強さを持つてくることができた。だから、皆さんに知ってほしくてこういう目標を立てたということをお話しました。

以上は、大湾さんのお話の一部分ですが、全体を通して、私たちが差別をなくすために何かできることをやっていかなければならないという気にさせられる内容でした。参加されたみなさんにとって、「人権」について、もう一度

自分の足元を見つめ直す、貴重な機会となりました。

参加された方からは、次のような声が多数聞かれました。

「『あることをないことにしない』これからは、自分の目の前で起こっている事実を隠したりせず、あることはあることとして考えないといけないと思つた。」

「自分と自分の周りにいる人すべてを大切にするために、自分がどうしなればならないかを考えるきっかけとなった。今、自分にできることを一杯することが自分の、そして周りの幸せにつながることに気付きました。」

「難しいことではなく、当たり前のことを当たり前のこととして受け止め、言葉にしたり行動に移すことが大切であり、私もそうしていきたい。」

「これからも同和教育について勉強して、差別を少しずつでもなくしていったり、みんなが楽しく過ごしていけるように日々、今日聞いたことを生かしていきたい。」

私たちの生活の中には、同和教育をはじめとして様々な差別や偏見があります。いまだに多くの人がつらい思いをしています。みんなが、偏見や差別、人権侵害について正しく知り、学びあうことが大切です。そして、気付いたら自分にできることをやってみることが、こうした人が増えていくことが、差別のない住みよい社会につながるのではないのでしょうか。